

田中研新聞

第135号

2024年
7月21日発行

甲南大学知能情報学部田中研究室 ほぼ毎月発行
http://carnation.is.konan-u.ac.jp
編集責任 田中雅博

7月2週目

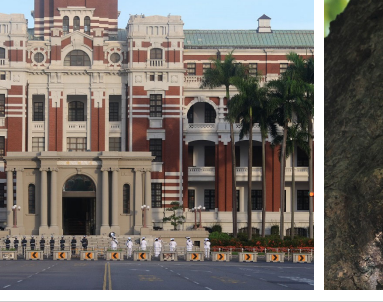
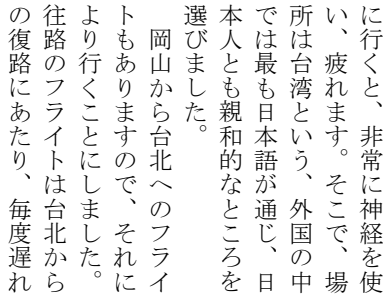
台中(台湾)開催の、家電関係の学会ICCE-TWに 田中教授、3度目の参加

概要

ICCE-TWは、Consumer electronics、すなわち、家電の電子・電子デバイスに関するIEEEの国際会議で、2014年から毎年開催されています。論文が2ページという制限もあり、比較的容易に参加できる学会です。左の写真が、開会式の様子です。田中は、2017年に参加したのが初回で、そのときはKORoをポスターで発表しました。以後、2回目が昨年で、図書館入館システムを口頭発表し、今回は3回目です。昨年、陳君が卒業研究で行った研究を口頭発表しました。私にとっては、この学会は「安近短」となります。安近短といえは、近年の日本人の旅行先のことを言いますが、私にとっては、参加費は安いもの(約9万円)、台湾ですので、安く旅行でき、まさに近く(岡山空港から桃園国際空港までたったの2時間強)、短は、往復の時間が短いため、旅行期間も短く済み、さらには、論文も2ページが限度という、短さです。日本の国内学会は論文という扱いではなく、「レジュメ」と言われており、あまり研究業績にならないという人もありますが、ICCE-TWはその点2ページであっても、「論文」なので、一応国際会議1本となりま。台湾の学生にとっても、これが研究業績になるのでしよう。学生の参加が多いようです。日本からも、先生に連れられてやってきている学生が多かったです。私の論文は、3日目の最後の時間帯の最後の発表で「デイブライニング」を用いたインテリジェントシステムと応用」でした(下段右)。このセッションは、外国人は私だけで、あとは全部台湾人の発表でした。それでも、英語でやり、一度も中国語が出てくることはありませんでした。立派!



学会は3日間開催され、初日は歓迎会、2日目はバンケット(晩さん会)がありました。歓迎会ときは、周りに誰も知った人がおらず、たまたまいたところのそばのテーブルに一人で座っている若い人がいたので、声を掛けたら、話に乗ってきたので、一緒に過ごすことにしました。それが、下段右の写真の高君です。



「デイブライニング」を用いたインテリジェントシステムと応用」でした(下段右)。このセッションは、外国人は私だけで、あとは全部台湾人の発表でした。それでも、英語でやり、一度も中国語が出てくることはありませんでした。立派!

2日目は、学会主催のツアーがあり、国立美術館と審計新村というところが予定されていました。せっかくなので、参加しました。美術館は台湾の人の絵が中心で、やはり台中では台北のそういう場所には到底及びません。少しがっかりし、次の審計新村(おしゃれなカフェやショップ、レトロなムード)に期待しましたが、直前に大雨の予報が出て、残念ながらキャンセルされました。その代わりに行ったのが、台中国家歌劇院でした。オペラのホールが見られるのが期待しましたが、残念ながら、部屋には入れず、中の空間のみ。いささか、がっかりして、次はバンケットでした。ツアーで話をした、湘南工科大学のグループとは、バンケットで同席し、そこに

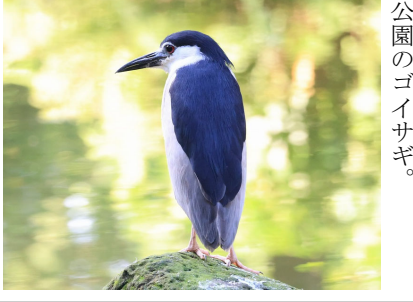
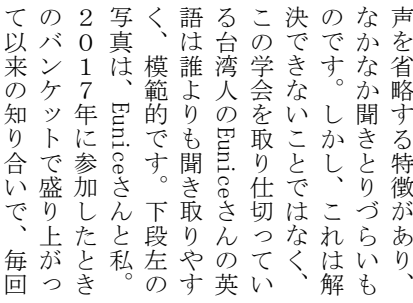
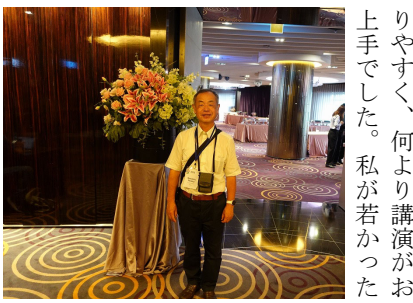
日本人の学生グループが集まったところに、最後に一人で行ってきた国立中央大学の蔡教授が日本語のわかばかり国際的になりました(右の写真)。彼が主として話をしたのはやはり私だったので、座った場所が少し離れていて、お互いもどかしい思いをしました。最後に記念写真を撮ってお別れ。

以上が主なイベントですが、もちろん3日とも私はしっかりと発表を聞いて質問もしました。特に、キートン講演(プレナリー)は3件とも聞きました。最初の、韓国のキム先生の Orin Learning and Its Application to Computer Visionは私にとって初めての内容の話だったので、非常に印象的でした。英語も分かりやすく、何より講演が上手でした。私が若かった

台湾人学生は、質問にびつたりと答えかどうかほとんどかくとして、たくさんしゃべって答えてくれました。母語の構造の違いが主たる原因とは思いますが、日本人学生の英語のレベルと台湾人学生の英語のレベルの違いに驚嘆した次第です。ただ、中国語ネイティブの人の英語は、子音が妙な音になるのと発音しにくい発音を省略する特徴があり、なかなか聞きとりづらいものです。しかし、これは解決できないことではなく、この学会を取り仕切っている台湾人の Euniceさんの英語は誰よりも聞き取りやすく、模範的です。下段左の写真は、Euniceさんと私。

岡山から台北へのフライトもありましたので、それにより行くことにしました。往路のフライトは台北からの復路にあたり、毎度遅れるようで、今回は1時間遅れました。座った場所は、後ろのほう(22C)で、これより後ろは小学生のスポーツチームの子供たちばかりでした。子供は嫌いではありませんが、さすがにうるさくて、少々気がめいりました。逆に、帰りは6Fで、とても前のほうの席で、横は大変感じのいい台湾人家族のお父さんと娘さん(小学校高学年くらい)でした。このお父さんは、本当にいい人で、降りるときに、私のバッグを上からおろしてくれました(私は窓際でも隣の席に座っていて、最後降りるときに、私に先に行けと促してくれ、とてもいい気持ちで旅行を終えることができました。アジア人は我先に行動する人が多く、この人は世界的常識が身についた人だという印象を受けました。

帰国前の1泊は、朝の時間を受けます。列車は、昨年、台湾の南端の懇丁に行った時と同じルートで南下し、途中で降りた感じですが、台湾の高速鉄道は、THSR(高鐵)といい、新幹線とは言いませんが、よく知られているように、日本が建設したものです。中の座席も700系と同じです。ただ、シートが少し古びた感じになっており、日本のように、どんどん新しい車両と取り換えているようではありません。台湾高鉄の路線は南北に1本なので、とても分かりやすく単純です。時間間隔も、1時間間に4〜5本くらいで、停車パターンはその中にいろいろ混ざっています。これなら外国人も簡単に使えます。また、予約はWebで行え、何度でも変更できるため、外国人の私でも簡単にできます。実際、飛行機が遅れたため、今回も途中で変更しました。切符は1枚です。この点は日本もそうすべきですね。複数枚の切符は外国人には容易に使えません。



7月16日

研究室学生の卒論、修論の

中間発表会実施



概要

前期の最後のゼミの日、卒業研究および修士論文の中間発表会を行いました。3時限は4年生、4時限は修士の発表を行いました。3時限は、その時間にゼミのない和田先生に聞いていただき、コメントをいただきました。一人7分話し、3分質疑を行いました。**中間発表会を行った理由**



発表と時間

(1) 研究室メンバー以外の人に聞いてもらうことで、緊張感をもって、発表の準備をする(だろう)という期待。
(2) 夏休みにはどうせ進まないだろうから、前期にやったことをきちんと整理し、少なくとも、後期、またははじめからやり直すという期待。
(3) 今年度は、テーマはそこそこ難しく、研究的なものが多いが、進みは非常に遅い。それを少しでも挽回するように。
(4) 直前の週のゼミが、私の台湾出張でオンデマンドとなったので、それを中間発表の論文作成と発表練習に割り振った(つもり)。
(5) 論文も一度はLaTeXを使って書いてみることで、本番の卒論を書く時の練習とする。

この時期に中間発表をしようと考えたのにはいくつか理由があります。
(1) 研究室メンバー以外の人に聞いてもらうことで、緊張感をもって、発表の準備をする(だろう)という期待。
(2) 夏休みにはどうせ進まないだろうから、前期にやったことをきちんと整理し、少なくとも、後期、またははじめからやり直すという期待。
(3) 今年度は、テーマはそこそこ難しく、研究的なものが多いが、進みは非常に遅い。それを少しでも挽回するように。
(4) 直前の週のゼミが、私の台湾出張でオンデマンドとなったので、それを中間発表の論文作成と発表練習に割り振った(つもり)。
(5) 論文も一度はLaTeXを使って書いてみることで、本番の卒論を書く時の練習とする。

4年生が9名いますので、一人10分で、ちょうど90分となります。和田先生は4時限に本校舎で授業があるので、絶対に発表が7分を超えないようにすること。
そのことを最初に言った上で始めたのですが、いざ話をさせてみると、7分経っても話が終わらない学生が続出し、私は、話をし



途中で、「ストップ!」と言って、強制的に話を止めた学生が半分ほどいました。このように、時間制限(それも、あまり長くない時間)がある発表の場合には、話すことをあらかじめ決めておくことが必要です。さらに、何度も練習をしなければ



ばそのようなことはできません。和田先生からは、優しい言葉でコメントをいただきましたが、和田先生にしては、それでも結構辛辣な質問が多かったように感じます。
和田先生からは、ご実家で栽培されているスイカをいただきましたので、終わってからゼミ室で学生がそれを分けて食べました。ナイフを入れたときのパリンという音がとてもよかったです。大変良く熟れていたのではないかと思います。おいしければおいしいといわなければ気持ちは伝わりません。重要なことです。**あと半年で、学生から社会人に変貌する必要あり**

研究タイトルは、一目で見て大体全体がわかることが大切です。皆さんが何気なくタイトルを付けたとしたら、皆さんの研究に対する意識は、本来あるものから非常に遠いものであること

を示しているように思います。そう思われたいようなタイトルを考えてください。いままで、すべてのことを「待ち」の姿勢で行い、言われたことだけ行い、言われなければ何もしないと行動を、自分がその時その時何をすべきかを常に考え、適切な行動をしていける人材になる必要がある、その時まであと半年しかないというのをわかってほしいのです。大学に入ったら、生徒から学生になり、卒業する前後には学生から社会人に変貌することが求められます。スーツを着て名刺交換の方法を学ぶだけが社会人ではありません。

11月22日には、鹿児島大学から先生方と何人かの学生がやってこれ、恒例の、合同研究会を開催します。こちらは国立大学だから自分たちとは違うという気持ちがあつたら、もうそこで

さあ、夏休み！ 君はどう過ごすか？

学生最後の夏休みですね。当研究室は、4年生9名、M2が1名、D3が1名です。全員今年度でここを去り、次の場所に行く見込みです。これが学生時代最後の夏休みという人も多いはずです。
就職すれば、年休が最大年間20日あります。といっても、最初の年は数日、それから徐々に増えていって、20日になるまで5年以上かかる会社も多いですから、自由に休める日は多くはありません。1か月以上も続けて休めるのは定年を迎えるまでこれが最後の年になるケースも多いでしょう。ここで、私がお勧めする、最後の年の夏休みの過ごし方です。もちろん、論文などが切羽詰まっている人はそれをしてください。

私がお勧めする旅行は、外国一人旅です。今、円がとも安く、残念ながら、ヨーロッパなどに行くのは大金が必要ですが、台湾などなら、国内旅行とそんなに変わらない金額で旅行ができます。

自分で飛行機を取り、自分で列車を取り、行くところも全部自分で計画していく旅行をお勧めします。日ごろ、自分で能動的に行動していない人には、このような旅行が最も効果的だと思います。円安ではありませんが、ヨ

ロッパなど、日本語の通じないところを旅行することとは大変効果的です。今は、スマホでGoogle翻訳もあるし、マップを見ることもできます。昔に比べてたはるかに旅行は簡単です。それでも、旅行するのは多分皆さんの人生にとって大きな効果を表すので

よう。英語ネイティブの国、たとえば、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどは英語の練習に効果的ですが、そうでなくても、近いところ、香港、マレーシア、シンガポールなどでも英語はよく通じるので、旅行が簡単です。
そこまで勇気がない人は、国内旅行でも、行かないより行ったほうが良いことは間違いありません。その際、列車や飛行機などの乗り物やホテルは自分で全部手配しましょう。北海道、沖縄など、お勧めです。夜は一人で居酒屋に入り、そこにいる人と知り合えれば最高です。

映画ではなく、活字の読書をお勧めします。読書週間はその人の教養レベルを

高めます。どんな本を読んでいるかを聞けば、その人の教養レベルが推測できます。昨今、入試などでは、どんな本を読んでいるかなど、その人の思想を探ることになるから聞いてはいいけないといわれたいと思います。が、人生イコール思想です。思想がない人間なんて、ロボットとどこが違うのでしょうか？
日頃から読書習慣を身に付け、毎週1冊の文庫本や新書などを読むようにしましょう。本がよいのは、読むスピードを自分で決めることができることです。また、文字を速読する習慣を身に付けることができます。本を読まない学生なんて!と聞かないように。

前回の田中研新聞で紹介した、「なぜ働いていると本が読めなくなるのか」では、本好きの著者が、仕事を始めてから本を読まなくなっていることに気づき、その生活をおかしいと思っ

た。暗くなり始めると気温も下がりが、縁側や屋外では、気持ち良い風が昼間熱せられた体を冷やしてくれていました。しかし、いま、夕涼みができる場所はあつたのでしょうか。
山間部にいけば夕方涼しいところがあるかもしれませんが。しかし、夕涼みという言葉はそんな人里離れた山の中ではなく、家のすぐ外という意味合いです。夏の最低気温が27度くらいでは、夕方の気温はまだ30度を超えています。少し郊外にある一戸建ての住宅ならまだかろうじて夕涼みができるかもしれません。私が若かったら、夕涼みのできる農村に移住して、エネルギーを使わずに快適な生活をしたと思うのですが(Dr.S: (田中))。

負けてです。就職するのは同じ土俵ですし、同じ会社に入ったら、全く同じ立場です。

発表を聞けば、研究にかけてきた時間がどれくらいだったのかは我々長年の経験で大体わかります。よく研究している学生は、休日以外のほぼ毎日、午前中から晩遅くまで研究室に居る、雑談もしながら、自分の研究のレベルを常に確認するので。

いままで、多くのよその研究室を訪問してきた経験から、研究室のコアタイムを設けているところのほうが多いように感じます。学生同士勉強会もやってみたらどうでしょうか。研究室とは何なのか。ここに1年半出入りするということとは自分にとってどういう意味があるのか。もう一度自分なりにその意義を考えて、あと半年の研究生活を過ごしてほしいもの

Feodorovの70代の友達が、花火の写真とともに、「夕涼みがてら来たけど、暑すぎ」ということを書いていました。なるほど、最近の夏は夕涼みという言葉は死語ですね。田中研新聞の若い読者は夕涼みという言葉の意味が体感できないかもしれません。この言葉を見ただけで、高齢者の書いた文だということがわかります。昔は、太陽が沈み(あるいは沈みかけ)、暗くなり始めると気温も下がり、縁側や屋外では、気持ち良い風が昼間熱せられた体を冷やしてくれていました。しかし、いま、夕涼みができる場所はあつたのでしょうか。

編集後記

9月17日(18日) 会津大学のインテリジェントシステムシンポジウムに、田中教授と芦川君が参加、発表

予定

路線	平日 Weekday		休日 Holiday	
	時	分	時	分
A1 台北車站	05	58	05	58
A2 三芝	06	07	06	07
A3 新北產業園區	07	13	07	13
A4 新莊副都心	07	13	07	13
A5 泰山	08	07	08	07
A6 泰山貴和	09	07	09	07
A7 體育大學	10	07	10	07
A8 長庚醫院	11	07	11	07
A9 林口	12	07	12	07
A10 山鼻	13	07	13	07
A11 坑口	14	07	14	07
A12 機場第一航廈	15	07	15	07
A13 機場第二航廈	16	07	16	07
A14 機場旅館	17	07	17	07
A15 大園	18	07	18	07
A16 橫山	19	07	19	07
A17 領航	20	07	20	07
A18 高鐵桃園站	21	07	21	07
A19 桃園體育園區	22	07	22	07
A20 興南	23	07	23	07
A21 環北	24	07	24	07
A22 老街溪	25	07	25	07